

大学2回生・3回生の心理的混乱と自己吟味の様相

甲南大学学生相談室 福井裕子

1. はじめに

新学期、期待と不安を胸に新生は大学の門をくぐる。過去の高校生活や予備校生活は、青年期前半の自我を形成するさまざまな体験と出会いの交差する大切な年月であったろう。しかし、彼らの目の前に見えかくれする大学入試突破という差し迫った達成目標は、時には非常なプレッシャーとなることもある反面、彼らの年齢で当然直面するはずの、課題や問題（親からの物理的・精神的自立や進路・将来設計など）を先送りするための便利な装置でもある。文部省の1995年度学校基本調査によると、今年、大学・短大への進学率は、男女合わせて45.2%に達し、4年制大学への浪人生を含む進学率は男子が40.7%、女子が22.7%と過去最高となった。18～19才人口の2人に1人が大学へ進学するという、驚くべき大学の大衆化を容認する社会にあって、大学は従前の研究機関としての使命はもとより、これら多くの青年たちを教育する社会的使命を必然的に担っている。

大学の教育的機能は言うまでもなく、高度に知的な知識・技術を伝達することと、卒業単位数は要求するものの、青年たちが存分に自己探索できるきわめて自由な4年間（またはそれ以上の時間）を保証していることである。長年頼りにしてきた偏差値による自己評価は、大学の門をくぐった瞬間からきわめて意味のないものになり、時には人格成長を妨げる厄介なものにさえなりかねない。受験生の時には二の次、三の次に軽んじてきたチャレンジ精神や人間関係能力が問われることは、一部の学生にとって脅威にも等しく、五月病といわれる軽い一過性のものからアパシーや引きこもりなどの長い経過をたどるものまで、さまざまなレベルの混乱をひきおこす。しかし、大多数

の学生たちは、初年度の一時的な混乱をいつのまにか切り抜け、2年次以降、それぞれ教室内、友人関係、クラブ・サークル、アルバイト先などに自分の居場所を見つけて、そこでの出会いや別れを手がかりに主体的な自己確立に向けて歩みだす。その途上、行きづまったり、エネルギー不足になったりして学生相談室に来室する学生も多いが、いろいろな悩みに対するアドバイスを求めてカウンセラーを訪ねる学生たちの背後には、同じような混乱を感じながらもこれといって学生相談室を訪ねるほどの動機や切実さをもたない大勢の学生たちがいると考えられる。

筆者は学生相談室のカウンセラーとしてこれまでの6年間、来室する学生と個別に向き合ってきた。カウンセラーはその役割上、クライアントに共感し、問題を共に考えたり、支えたりしていくが、時には相手の悩みや苦しみとの距離のとり方に迷う場合がある。この学生はこの問題点でつまづいているが、果たして別の学生ならば同じ問題をどのように解決していくのだろうかという、少し離れた視点から目の前のクライアントを対象化したり、客観的にとらえる、いわば「常識の目」を片一方でもつことも忘れてはならない。ここでは、これら大多数の、ふつうに悩み、ふつうに乗りこえていく（と思われる）2・3回生に目を向け、彼らが大学生活の中でどんな問題に直面し、またそれをいかに自分の中に統合して主体的な自己運営の手がかりにしていっただかを概観したい。

2. 問題

吉良（1993）は、九州大学教養学部の担当講義の中で、自らの心理的な体験をふり返らせるという教育的な意味を込めて、1年次受講生に対して、

大学入学以来の心理的混乱を15個のカテゴリーとして用意し、1位から5位まで順位をつけさせた。吉良が選択肢としてあげたカテゴリーは、家族との関係・日常生活面・入学以前からの友人関係全般・入学以前からの異性友人関係・入学後の新しい友人関係全般・入学後の新しい異性友人関係・自分のあり方や性格・自分の能力や学力・将来のこと・大学での生活面・大学での学業面・サークル活動・アルバイト・経済面・その他、の15項目で、さらに1位から5位までのカテゴリーのそれぞれに対して具体的な体験記述を求めた。吉良の整理方法は、受講生を文系学生・文系女性・理系男性・理系女性の4群に分け、それぞれの群の学生が1位にあげたカテゴリーだけを拾いあげて集計した。その結果、全体でもっとも多く選択されたカテゴリーは「日常生活面」で、2番めに多く選択されたのは「自分のあり方や性格」であるが、文系/理系によって、また性別によっても選択するカテゴリーに多少の違いがみられると指摘されている。

また、吉良の報告の中の具体的な体験記述では、1位の「日常生活面」の8個中6個が下宿生によるもので、大学入学後初めて体験するひとり暮らしにとまどっている様子がよく伝わってくる。しかし受講生の中に下宿生が多ければ、「日常生活面」や「家族との関係」などが多くあげられるのはおそらく当然であろうと思われる。吉良の報告では、自宅生/下宿生の比率が明らかにされていないのでなんとも言えないが、大学1回生ではたとえ自宅生であっても大学生活に適應することは大きな心理的負担になるには違いない。今後の課題として、受講生の分類に自宅生/下宿生の区別も加えると、自宅生の心理的混乱の内容がより明確になるものと思われる。

さらに、吉良は15のカテゴリーを整理する目安として、基底部に日常生活レベル（「日常生活面」「家族との関係」）をおき、中間部に対人関係レベル（「大学入学後の新しい友人関係全般」

「自分のあり方や性格」など）をおいて、その上に活動遂行レベル（「学業面」「サークル活動」「アルバイト」など）をのせてピラミッド型に図式化した。その上で、吉良は1年次の心理的混乱が、この学生生活をなりたさせる3つのレベルすべてにわたるものであることを指摘した。この図式は1年次生の学生生活をとらえるのに非常に有効な手がかりとなり得る。1回生の学生が現在、どのレベルでつまづき、それが他のレベルへどう影響しているかを視覚イメージで把握しやすくなる。しかし、大学生活の中間期である2・3回生では、日常生活面でのとまどいはいちおうなくなったものとして、新たな図式が必要であると思われる。また吉良自身が述べているように、15個のカテゴリーの中には、内容が若干重複するものがあり、簡便化するためには吟味が必要であろう。

ここでは、以上のような点を鑑みながら吉良の手法を用いて、大学2・3回生がどのような心理的混乱を感じているかの、数量的把握の検討を行ない、記述内容を記載する。記述内容の記載の意義は、筆者が吉良のこの研究報告に接したとき、学生相談室での個別カウンセリングでは拾いきれない、大学生の全体像が非常にわかりやすい形で述べられていると感じたことによる。

本学の学生相談室でも、男女別、回生別、学部別、月別利用者数などと共に、相談内容も分類して（心理相談/心理検査/修学/進路/生活健康）、利用者統計報告を行っている。しかし、あくまでも数量の分析にとどまり、学生ひとりひとりの実像や問題解決のプロセスは症例報告を待たねばならない。個々の症例からその背後にある青年期特有の発達課題や問題点を探るマイクロ眼的手法と、大勢の学生を対象にした調査から学生の全体的傾向を探るマクロ眼的手法は、すでにその大きな成果が刊行された書物や各専門誌に収められている。河合（1986）は「事例研究の意義と問題点」の中で、事例研究は「わずか一例をもってしても、多くのことが集結的に生き生きと示しうる

効果をもち、問題点をふかくめぐりだせるとするが、「そこには治療者自身の人格がおおいに関係していて、(中略)ひとつの事例研究はその報告者の人格と切り離せないもの」としている。ゆえに、事例研究はその完結性——クライアントとカウンセラーの、二者間でくりひろげられる閉じられた世界の出来事——から、読者はまるで物語を読むようにイメージを広げることができ、当事象の全体のなかでの位置づけは難しい。統計調査は、数量的分析が精緻に行なわれ、有意差を求めて全体傾向を探るが、回答者は「被験者1」として処理されるのでその生き生きとした実像をとらえにくい。

吉良の体験記述の報告はその両者をつなぐものであり、学生相談を担当する者にとって、個々のクライアントにたいするときの、健全なバランス感覚を保つには役立つものであろう。筆者が吉良の報告を読んだときに受けた印象深さはおそらくこのような理由によるものと考えられる。ただ、体験記述の記載が何らかのルールや著者の視点なく行なわれたときには、議事録のような記述内容の羅列になりかねないので十分注意する必要がある。

また、学生相談室に来室する学生の来談時期に関しては、鶴田が4年間を大学生活サイクルととらえ、多数の事例から学年別の心理的特徴の研究を行なった。来談学生を検討した結果が一般の非来談学生にも類推できるかについては、未だその研究報告が待たれているところだが、ここでは2・3回生を対象としたので、本研究の結果から鶴田の学年別モデルに言及できる可能性も合わせて探ってみたい。

3. 方 法

①本学文学部前期開講の「ライフサイクルの心理学」の講義受講者に対して、1995年6月下旬、「青年期の発達課題」をテーマにした授業の最後20分間を利用して調査した。心理的混乱の具体的な体験記述を引き出すため、「現在の大学生活に

おける気がかり」といういくぶんソフトなタイトルで導入した。

②回答した受講生は、1回生から留年を含めた4回生と研究生までの163名あったが、そのうち2・3回生の123名を調査対象とした。文系/理系の内訳は123名中、文系学部113名、理学部10名であった。理系の人数がきわめて少ないので、本調査では文系/理系の区分は設けなかった。男女別の特徴や、自宅生/下宿生別の特徴があることを予想してそれらの記入欄は設けた。回答者の内訳は表1、2に示す。

表1 回答者の学年・性別の内訳

	2回生	3回生	男女別
男	20	25	45
女	70	8	78
回生	90	33	123

表2 自宅生と下宿生の内訳

	2回生		3回生		合計	
	男	女	男	女	男	女
自宅	11	58	19	5	30	63
下宿	9	11	1	2	10	13
合計	20	69	20	7	40	76
	89		27		116	

(あと7名は自/下の記入なく不明)

③調査用紙の内容は次のふたつである。1. 大学生活の中で心理的に混乱(肯定的、否定的両方の体験を含む)を感じた事柄に1位から5位まで順位をつけること 2. そのうち3位までについて具体的に記述すること(書きたくないものについては書かなくてよい)

④吉良の作成したカテゴリー群では、下記の13項目に加えて、「大学での生活面」があったが、それはサークル活動や友人関係の項目に集約されると思われたので省いた。また、吉良版では「自分の能力や学力」「大学での学業面」とあったが、

本調査では「学業面又は自分の能力や学力」としてまとめ、また吉良版の「サークル活動」を「クラブ・サークル活動」とした。

⑤実際の調査用紙は図1のとおりである。

図1 調査用紙

現在の大学生活に関するアンケート			
_____学部	____回生	学籍番号_____	氏名_____
_____才	(男・女)	(自宅通学・下宿)	
<p>今から20年近く前になりますが、『青春時代が夢なんて、あとからしみじみ思うもの。青春時代の真ん中は胸にとげさすことばかり…』という歌詞のヒット曲がありました。時代は移り変わっても、青年期がいろいろなことに迷ったり悩んだりしながら、これからの自分の人生の方向性を決めていく大切な時期であることに変わりはありません。これはあなたが毎日の生活の中でどんなことが気がかりになっているのかを知るための調査です。</p>			
<p>I. 現在の大学生活の中で、あなたはどのような事柄で心理的に混乱を感じていますか、以下の項目から選んで数字で5位まで順位をつけなさい。</p> <p>(ここでいう「混乱」とは、否定的な意味だけでなく、肯定的な意味も含みそれは新たな体験によって心理的に揺れ動く体験をしたことを指す。)</p>			
• () 家族との関係	• () 日常生活面	• () 入学以前からの異性友人関係	• () 入学後の新しい異性友人関係
• () 入学以前からの友人関係全般	• () 入学後の新しい異性友人関係	• () 学業面又は自分の能力や学力	• () クラブ・サークル活動
• () 自分のあり方や性格	• () 将来のこと	• () アルバイト	• () その他
• () 経済面			
<p>II. 上で順位をつけたうち、1～3位のものについて具体的に記述して下さい。ただし、書きたくないことについては無理に書く必要はありません。</p>			
①			
②			
③			
ご協力ありがとうございました。			

4. 結 果

調査結果を整理する際、数量把握については、吉良は学生に1位から5位まで順位をつけさせた中で、1位の項目だけを取り上げて数えたが、ここでは、より広く学生の心理的混乱の程度をみるため、1位、2位、3位まで取り上げた。何名の

者が1位から3位までそれぞれにその項目を選んだかを数えて、その上で1位から3位までの比重を考慮して、1位を3点、2位を2点、3位を1点として点数換算し、合計点の高かった項目順に並べたのが、下の表3、4(a)(b)、5(a)(b)、6(a)(b)である。

表3 回答者全体(123名)の選択人数

順位	項 目	1 位	2 位	3 位	合計点
1	自分のあり方や性格	20	25	20	130
2	入学後の新しい友人関係全般	22	22	8	118
3	クラブ・サークル活動	12	18	11	83
4	入学後の新しい異性友人関係	14	7	21	77
5	将来のこと	11	13	15	74
6	学業面又は自分の能力や学力	10	9	10	58
7	家族との関係	8	6	6	42
8	日常生活面	9	3	8	41
9	アルバイト	4	6	11	35
10	経済面	5	4	6	29
11	入学以前からの友人関係全般	3	5	6	25
12	入学以前からの異性友人関係	4	5	0	22
13	その他	0	1	1	3

回生別

表4(a) 2回生(90名)の選択人数

順位	項 目	1 位	2 位	3 位	合計点
1	入学後の新しい友人関係全般	20	18	7	103
2	自分のあり方や性格	14	19	15	95
3	クラブ・サークル活動	12	13	9	71
4	入学後の新しい異性友人関係	9	5	16	53
5	将来のこと	6	6	8	38
6	家族との関係	6	6	5	35
7	日常生活面	8	2	6	34
8	アルバイト	4	5	5	27
9	学業面又は自分の能力や学力	3	5	7	26
10	入学以前からの異性友人関係	4	5	0	22
11	経済面	2	3	6	18
12	入学以前からの友人関係全般	1	3	5	14
13	その他	0	1	1	3

表4(b) 3回生(33名)の選択人数

順位	項目	1位	2位	3位	合計点
1	将来のこと	5	7	7	36
2	自分のあり方や性格	6	6	5	35
3	学業面又は自分の能力や学力	7	4	3	32
4	入学後の新しい異性友人関係	5	2	5	24
5	入学後の新しい友人関係全般	2	4	1	15
6	クラブ・サークル活動	0	5	2	12
7	経済面	3	1	0	11
7	入学以前からの友人関係全般	2	2	1	11
9	アルバイト	0	1	6	8
10	家族との関係	2	0	1	7
10	日常生活面	1	1	2	7
12					
13					

男女別

表5(a) 男子(45名)の選択人数

順位	項目	1位	2位	3位	合計点
1	自分のあり方や性格	7	7	8	43
2	将来のこと	6	9	5	41
3	学業面又は自分の能力や学力	7	6	3	36
4	入学後の新しい友人関係全般	4	8	2	30
5	入学後の新しい異性友人関係	6	1	6	26
6	クラブ・サークル活動	2	6	4	22
7	家族との関係	5	0	3	18
8	経済面	3	2	2	15
9	日常生活面	3	1	2	13
10	アルバイト	0	2	7	11
11	入学以前からの友人関係全般	1	2	2	9
12	入学以前からの異性友人関係	1	1	0	5
13	その他	0	0	1	1

表5(b) 女子(78名)の選択人数

順位	項目	1位	2位	3位	合計点
1	入学後の新しい友人関係全般	19	13	5	88
2	自分のあり方や性格	13	17	12	85
3	クラブ・サークル活動	10	12	7	63
4	入学後の新しい異性友人関係	8	6	12	52
5	将来のこと	5	4	9	32
6	日常生活面	6	2	6	28
7	家族との関係	3	6	4	25
8	アルバイト	4	4	4	24
9	学業面又は自分の能力や学力	3	3	6	21
10	入学以前からの異性友人関係	3	4	0	17
11	入学以前からの友人関係全般	2	3	4	16
11	経済面	2	3	4	16
13	その他	0	1	1	3

自宅生/下宿生別

表6(a) 自宅生(93名)の選択人数

順位	項目	1位	2位	3位	合計点
1	入学後の新しい友人関係全般	19	15	5	92
2	自分のあり方や性格	12	18	18	90
3	クラブ・サークル活動	11	15	10	73
4	入学後の新しい異性友人関係	11	6	4	59
5	将来のこと	6	11	19	59
6	学業面又は自分の能力や学力	9	4	10	45
7	アルバイト	4	5	8	30
8	家族との関係	4	5	6	28
9	入学以前からの友人関係全般	3	5	6	25
10	日常生活面	6	2	1	23
11	入学以前からの異性友人関係	4	4	1	21
11	経済面	4	2	5	21
13	その他	0	1	0	2

表6(b) 下宿生(23名)の選択人数

順位	項目	1位	2位	3位	合計点
1	自分のあり方や性格	6	5	2	30
2	入学後の新しい友人関係全般	3	5	2	21
3	日常生活面	4	1	6	20
4	将来のこと	3	1	5	16
5	家族との関係	3	0	1	11
5	入学後の新しい異性友人関係	2	1	3	11
7	クラブ・サークル活動	1	2	1	8
7	経済面	1	2	1	8
7	学業面又は自分の能力や学力	0	4	0	8
10	アルバイト	0	1	2	4
11	その他	0	0	1	1
12					
13					

【受講生全体の傾向】

まず、受講生全体(表3参照)でいちばん心理的に混乱を感じている項目は「自分のあり方や性格」であった。大学生活への適応が迫られる1回生や、卒論作成と就職活動に忙しい4回生と違い、大学2・3回生の2年間は大学生活の中間期として、比較的ゆったりと過ごせる時期なので内省力の強まりがこの項目に反映されたといえるだろう。

次に多かったのが、「入学後の新しい友人関係全般」であった。言うまでもなく、大学はさまざまな背景をもった人たちがくるので、高校までの友人とは関係の質が大きく変化せざるを得ない。かなりの学生が高校のときの親密な友人関係をなつかしく思い、大学以後の新しい友人関係の希薄さにとまどっているようだ。このことは、以前に筆者(1993)が友久や前田とともに『現代大学生の友情とエロスについて』の中で言及したが、やはり本調査でも同様の結果となった。しかし、具体的な体験記述を読んでみると、友人関係についても足りなさを訴えるものも多いが、それなりに自分自身でそのことを整理して他者との距離を

考えていこうとするものもあり、友人関係を通して自己確立の様相がみられる。1位、2位の得点数と、3位以下とはかなりの差があり、対人関係についていろいろと考えたり気をつけているものと思われる。

3位の「クラブ・サークル活動」、4位の「入学後の新しい異性友人関係」は現在の学生生活上の大きな関心事であろう。2位から4位までは、実際的で対外的かつ対人的な項目が続き、外向的な傾向があるのに対して、5位の「将来のこと」や6位の「学業面又は自分の能力や学力」は自分自身で考え、取捨選択していくべき、いわば内面的な課題となる。続いて7位に「家族との関係」、8位に「日常生活面」という、他者と分かちあうことにはなじまない個人的な事柄があげられ、9位の「アルバイト」、10位の「経済面」はますます現実生活と直結した事柄となる。そして最後に、大学入学以前からの友人や異性との関係がでてくるがこれらの得点はごく少ない。

2・3回生全体を概観していえることは、「入学後の新しい友人関係全般」「クラブ・サークル

活動」「入学後の新しい異性関係」など、現実の大学生活と対人関係に大きな心理的混乱を覚えているが、同時に自分自身の将来や見通しについてはもちろんのこと、私的な日常生活面にも気があるようだ。しかし、つねに頭にあるのは、対人関係や現実生活すべてを運営する主人公としての「自分のあり方や性格」で、彼らはあらゆる場面で自分を他者と比較したり、内容を深めたりしながら自己吟味を行なっているといえよう。

【2回生と3回生との比較】

2回生と3回生の順位を比較してみると(表4 a, b参照)、明らかな違いがみられる。2回生では「入学後の新しい友人関係全般」が1位だが、3回生では「将来のこと」が1位である。「自分のあり方や性格」に表わされる自己吟味は両学年とも2位に位置し、つねに高い関心が払われている。得点を見ると、2回生での心理的混乱は「入学後の新しい友人関係全般」(1位103点)に始まり、2位「自分のあり方や性格」(95点)、3位「クラブ・サークル活動」(71点)、4位「入学後の新しい異性友人関係」(53点)と続き、現在の大学生活を彩る人間関係に熱中している様子がうかがわれる。反面、「将来のこと」(5位、得点は38点で、1位の約1/3)や学業面(9位、26点)はあまり気がかりとはなっていない。しかし一転して3回生では、「将来のこと」は1位とほぼ同じ得点で、学業面も3位だが1位とほとんど点差はない。2回生までいろいろと気になっていた対人関係やサークル活動の項目はすべて4位以下となり、2回生では気がかりの1位であった友人関係も1位の半分にも満たない点になるのが特徴的である。ここ数年の不況による就職戦線の厳しさは周知の事実であり、実質的には3回生の1月頃より就職に関する資料請求が始まるという現実なので、それが如実に反映されているといえよう。2回生と3回生は、大学生活サイクルの中間期としてひとまとめに論じられることが多かったが、これをみる限りでは本人たちにとってはかな

り質の異なる学年意識をもっているのが明らかである。

鶴田は学生相談事例からみた各学年の心理的特徴をまとめ、大学2年生は外的課題が少なく現実の枠組みが緩やかな時期である故、同性、異性との横の親密な対人関係が面接の主題となりやすいと指摘している。(鶴田 1991a) 鶴田はこれを超えて「あいまいさの中の深まり」と名づけて、これが現実との関わりが増えてくる3回生・4回生の期間の体験を左右していくと論じた。豊富な臨床体験を綿密に整理、分析した上で鶴田は以上の知見を得たが、本調査によっても、2回生では友人、異性など横の人間関係を求め、クラブ・サークル活動に熱中していることが明らかとなった。もちろんこれは簡単なアンケート調査の結果からみた外面的な事象にすぎないので、ひとりひとりの内的な深まりのプロセスは知るよしもないが、鶴田の指摘を一般の非来談学生に適用するときの傍証になるものと思われる。また、鶴田は3年生で来談する学生の特徴として、精神的に問題をもつ学生の比率が多く、内容としては進路・将来への不安が具体的に語られることが多いと指摘している。(1993 b) 本調査の結果でも、3回生では自分自身のこととともに将来のことや能力や学力面について高得点の気がかりとなっており、鶴田の指摘に添った結果となった。筆者の印象では、将来への不安を語る来談学生から推測する以上に、就職活動に不安をもつ非来談学生はもっと多いのではないかと思う。本調査の3回生のつけた順位と得点はそのことを示している。

〔男女別比較〕

心理的混乱の順位に性別の特徴があるかどうかをみると(表5 a, b参照)、男子では1位の「自分のあり方や性格」と2位の「将来のこと」がほぼ同じ高得点で並び、3位には学業・能力面があげられる。同性や異性との対人関係やサークル活動は4位以下に下がっているのが、女子との著しい違いである。女子では、友人関係と自分自身に

ついでに混乱がほぼ同じ高得点で1位と2位をしめ、サークル活動、異性のことが続く。「将来のこと」は5位にあげられているが、1位の1/3の得点しかなく、学業・能力面は9位で1位の1/4以下の得点となる。従って男子は女子に較べて、この時期、自分の能力や将来に不安をもっている者が多く、それだけ自分にきびしく、内省や自己吟味が行なわれていることと思われる。

西川(1993)は、大学生における自己の二面性(一体性と分離性という2つの側面)と自我同一性との関係を検討した結果、分離性よりも一体性の意識の方が彼らの自己評価を高めていることと、特にその傾向は女子において強いことを指摘した。女子は男子よりも、人間関係において一体感を求め、それが満足感に結びついていく特性を有しているが、そのことは本調査の心理的混乱の順位からみても検証されたといえよう。男子は女子に較べて、対人関係よりも自分自身の能力や発展性により大きな関心をもっているようだ。

【自宅生と下宿生との比較】

自宅生では、1位に友人関係、2位に自分自身のことが高得点で並び、少し点差があって3位にクラブ・サークル活動が続く。この順位の並び方は表5(b)の女子の順位とほぼ同じであるが、これは自宅生93名中女子が63名であることから、表5(b)の女子の順位(女子78名中自宅生は63名)とほぼ重複することとなった。下宿生の方では23名中男子10名、女子13名でほぼ男女のバランスがとれているので、「下宿生」という分類で括った結果は多少は信頼できると思われる。1位は「自分のあり方や性格」で、2位の友人関係とは少し差がある。3位に「日常生活面」があがってきているのはやはり下宿生によることと思われる。また5位は「家族との関係」で、「入学後の新しい異性友人関係」とまったく同じ得点であることは、他のどの分類でも見られなかったことであり、下宿が家族との関係を見直すきっかけになったことが示唆されている。女子又は自宅生では高順位の

「クラブ・サークル活動」は下宿生では7位に落ちており、あまり高い関心は払われていないようだ。

以上の検討結果をまとめてみると

- I. 2・3回生全体に共通する大きな心理的混乱は、「自分のあり方や性格」で、それまでの子どもから大人へ心理的に変化するために必要な混乱や自己吟味が行なわれているものと思われる。
- II. 2・3回生は、大学生生活中間期としてひとまとめに論じられることが多かったが、2回生と3回生では心理的混乱にそれぞれの特徴がみられる。すなわち、2回生では友人、異性、クラブ・サークル活動など横の人間関係を熱心に求め、3回生では一転して将来のことや能力面など現実的で個人的なことに混乱を覚えている。
- III. 女子は人間関係に混乱を感じる人が多いが、男子は自分自身の将来や能力などに不安や混乱を覚えている。
- IV. 下宿生は対人関係とほぼ同じくらいの大きさで日常生活面に心理的混乱を覚えている。

5. 体験記述

ここでは学生の心理的混乱の多かった順に具体的な体験記述の内容をそのまま記載する。2・3回生では混乱の渦中か、あるいは整理の糸口を見つけ出そうとする時期であるためか、悩んだり苦しんだりしている記述内容が多い。しかし、4回生になるとその混乱を再統合して主体的な自分のあり方を見だし、しかもそれを意識化して自分なりにまとめている記述が多く見られたので、参考までに最後にまとめて記載した。

〔自分のあり方や性格〕

・高校までは父や母のような生き方が絶対だという考えが、無意識の中に確固たるものとしてあった。ところが、別にいろいろな生き方があっても

いいんだということに気がついた途端に、自分を規定していた基準が崩れ、呆然とした。(文3、女子)

・なぜこんな性格になってしまったのかとか、本当にこのままの自分でいいのかというようなことを考えた。自分で自分のことが気にいらぬのなら、どのようにして変えていこうかということばかり考えていた時期があった。(経済3、男)

・理想とする自分と現在の自分とがあまりにもかけ離れすぎてその間をうろうろし、どうすることもできない自分を情けなく思う。(理3、男)

・自分が優柔不断なあまり、ものごとが決められず、親に口出しされるとついその通りにしてしまい、それでいてそれでは満足できず、苦悩する繰り返しなので、どうにかして自分の性格をもっとよく知りたいと思う。(文2、女)

・高校までずっと陸上部でがんばってきたが、今はやめている。そのためか、自分の居場所がなくなってしまう気がして不安になることが多い。自分の誇れるものがなくなり、自分とは何なのかを考えることが多くなった。自分のことを必要としてくれる人がどれくらいいて、自分はその人に何ができるのだろうか、また何のために生きているんだろう、と考えることも多くなった。(文2、女)

・「大学生活は楽しい」とよく耳にしていたけど、私はそうとは感じていない。ただ自由が多いのだと思う。そこで何かをしようとしなければ、何もせずに時間が過ぎる。どうすれば楽しく有意義に過ごせるか、自分のあり方について、日々考える時がある。(文2、女)

・毎日内容のない授業を聴いたふりをして、アルバイトばかりして本当に自分のためになっているのか、と感じたことがあった。でもそれはそれで貴重なものではないかと思っています。(経済3、男)

[入学後の新しい友人関係全般]

・本当の友人というものがいない気がする。まだあせらなくてもよいのかもしれないが、すごく悲

しくなる。楽しいときは楽しいし、ワイワイしているが、何かすぐもの足りなくて、自分も他人も信用できなくて。もっと自分を見せてぶつかっていかうか?(文2、女)

・主にクラブ内での友人関係とか、先輩、後輩とかの関係で混乱を覚えた。クラブに入っていることで、必然的につきあっていかなければならない周囲との関係の中で、「どこまでしゃべっていいのかな」というところで、かなり悩んだりした。(文2、女)

・クラスというものがいないため、結局みんな最初に友達になった人と一緒にいることが多い。1年たった今では慣れたが、最初は性格が合わず、といって他のグループにはいることもできず、悩んだ。そして毎日イライラし、外で妙にニコニコしている分、家に帰って無表情なことが多く、家族にいやな思いをさせたと思う。以前はたいしたことじゃなくても、ウジウジ悩む性格だったが、最近では「あの人がそういう考えなら、それはそれでいい」と簡単に考えるようになった。(文2、女)

・今までわたしの周りにはいなかったタイプの人もいたので、最初とまどったが、みんな根をいい人で、人は見かけで判断できないと思った。(文2、女)

・高校の頃のようにクラスがあるわけでもないので、友達ができて授業だけの友達でおわってしまうことがあり、本当の友達ができるのだろうか悩んだ。でもクラブ活動を始めて、おかげでいい友達をつくることのできたのでよかったと思う。(文2、女)

・高校時代までの友人と較べてしまい、「少しやりにくいなあ。」と感じることも多々ありました。自分と合う人を見つけようと必死になっていたからで、今までの自分を少しも変えようとしなかったからだと思います。(文2、女)

・高校のときより、さらに深く、早く友人関係になれた。出会ってまだ少ししかたっていないうちに、家に泊まらせてもらったり、一緒にマージャ

ンをしたり、友人ってこんなにいいもんだなあと、心理的に変化した。(理2、男)

〔クラブ・サークル活動〕

・サークルにはいるべきかどうか悩んだ。入らないと大学生活にとり残されるような気がした。

(文2、男)

・サークル自体は楽しいが、サークルに大学生活の時間のほとんどを使っている、今の状態でいいのと思うことがある。(経済3、男)

・サークルとは気軽な活動と考えていたのだが、2回生のはじめは責任とか、人間関係でとまどった。2回生主催のボーリング大会を開くにあたり、今まで見えていなかった、人の違う面が見えてきた。(文2、女)

・自分のあり方とサークル活動は、私の中では密接な関係だと思います。というのも、サークル活動の中で、私はどのような立場で、何をしなくてはいけないのかということから、自分はこうありたいと思うようになったからです。サークル活動の中での心理的混乱は、やはり50人以上の人間をまとめて動かしていく中での、指導者としてのやり方、人間関係など。しかしすべてがプラスになったと思う。(文3、女)

・大学に入学して、クラブに入部し、大学生活の大部分を占めるようになりました。そこでいろんな人との出会いで、たくさん刺激を受けたり、先輩との考え方の違いに悩んだりしています。クラブは今の私にとって何なのかいつも思うことです。(文2、女)

〔大学入学後の新しい異性友人関係〕

・自分のあり方や性格に関連すると思うが、自分がどういう態度をとっていたらうまくつきあえるかということに悩んだ(経済3、女)

・大学に入って初めて彼女ができた、初めて経験する女の子のやさしさやわけのわからなさにもふりまわされながらも幸せだった。そして今の倦怠期

とはこういうことかと実感している(内諾)。知れば知るほど女の人は不思議です。(経営3、男)

・彼女を通して得たものはとても大きく、彼女から信頼されることによって、友人でさえもあまり信頼していなかった私が、徐々にそういった他者との境界線をとり除けるようになった。(法3、男)

〔将来のこと〕

・大学に入ってから将来のことを決めたらいいやと、軽い気持ちで考えていればもう1年が過ぎました。今、やっとなりたい職業を見つけましたが、本当にこの職業が自分にあっているのか不安に思う時があります。(経営2、男)

・大学に入るまではあった目標があいまいになってきています。やる気というか情熱がさめたというか、本当は自分が何をしたいのかとか、就職のこととか、まだ2回生と先送りしていますが、そろそろマジメに考えないと、と思っています。

(法2、男)

・大学受験の結果が不本意なため、自分が今から学ぶことは本当に自分のしたいことと関連があるのかわからなかった。友達は自分の将来の職業を決めてそれに向かっているのに、自分はどうしたらよいのか方向が定まらない。(法2、男)

・就職活動などの話を耳にすることが多くなり、自分もこのまま来年の4月にはスーツを着ているのだろうか、なんて考えると、自分には将来やりたいことがないことに気づき、あせったり情けなくなる。(経済3、男)

〔学業面又は自分の能力や学力〕

・自分が希望した大学に落ちて、スベリ止めであった甲南、それも○学部がよかったのに、全く興味のない経営学部で、学校に行くのもイヤだったし、雰囲気も嫌いだった。私は人を学歴でみるころがあったので、自分のことが頭悪いと思われるのも嫌だし、自分でも認めたくなかった。今はだんぶ落ち着いたけれど、一生、受験での挫折

のことは忘れないだろう。(経営2、女)

・今は経営学部だが、当初は国文学をやりたいかった。入学後、経営学の勉強が始まったが、いまひとつピンとこず、自分にとっての経営学が何であるのか悩んだ。2回生の終わり頃に、経営財務論の中におもしろさを見つけ、進むべき方向を見いだしたが、もっと早く自分としてのおもしろさを見い出せなかったことを後悔している。(経営3、男)

・大学の勉強は自分次第で、自分の能力が数字的結果ででないし、どういう風に勉強したらよいか、今までは人と競うことで、自分の学力をだしてきたからとまどった。(文2、女)

〔家族との関係〕

・友人たちや異性とのつきあい、クラブ活動の中で、高校のときよりはるかに家族と過ごす時間が少なくなり、それに対する親との意見の対立や一致があった。(文2、女)

・入学により今まで生まれ育った〇〇を離れ、初めての一人暮らしを体験した。そのことにより食事、洗濯など親がやってくれて当然と思っていたこと全てを自分ひとりでやらなければならなかったことがしんどかった。(経済2、男)

・私が将来なりたい職業とは関係のない資格をとりなさいという親ともめた。しかし、親の話やいろいろな人の話を聞いて、親は私のことをよく考えてくれたことがわかってとてもうれしかった。姉も私にいいアドバイスをくれた。(文2、女)

〔日常生活面〕

・高校生活はとても忙しいものだったと思う。そういう意味では充実していた。だけど大学に入学して、自分の時間がいきなりふえたこと、本当に充実について考えることもふえて、平凡な生活が嫌になった。(文2、女)

・体育会に入っていますが、朝起きて部に行って、1日中部活をして、寝てしまうという、毎日が同じことのくり返しでこんなので大丈夫かなと心配

になってきました。(経済2、男)

・以前は母親任せだったことを自分一人でやらなくてはならないようになり、親のありがたさがわかった。それに疲れて帰ったりしても一人なので、ストレスをどう処理してよいかわからず、一人もんとしていた時があった。今では自分のスタイルができて、ひとり暮らしについては快適である。(文2、女)

〔アルバイト〕

・アルバイトを始めたのは去年の夏からだったが、始めてみて、アルバイトはしんどい、金をもらうためだけにイヤイヤするというイメージから楽しみにしているもの変わった。これはバイトの友人関係がよいからだと思う。(文2、女)

・高校を卒業して、すぐにある所でウェ이터のアルバイトをしていた。そこで僕はそれまでのような考えでやっていた。例えば、仕事は相手から言われたいとしない、ちょっと遊びの用が入ったらシフトを変えるなど。それが何回か続いて、ついには上の人に怒られてやめてしまった。その時、心理的に大きく混乱を感じたといえる。(理2、男)

・大学になって初めてアルバイトを始めました。今まで客であったのが、店員という立場になり、『ありがとう』という簡単な言葉がどれだけありがたい言葉であるかということをしりました。(経済3、男)

〔経済面〕

・奨学金の願書を書くときに、自分の家の家計の実体について知ったときに混乱を感じました。(理3、男)

・自分の生活費を自分で負担しているので、生活することのたいへんさを実感しています。特に今、免許をとるためバイトをしていないので余分なお金がありません。(文2、女)

・高校と違って洋服もたくさんいるし、みんないい物を持っているから、私も買わなければと思っ

てどんどん買っているうちに、気がつくとも月末にお金がなくなっている毎日でした。（文2、女）

〔入学以前からの友人関係全般〕

・中学、高校時代の友人と遊ぶことが少なくなり、このまま自然消滅してしまうのではないかと思った。（文2、女）

・高校卒業後しばらく誰とも会ってなくて、半年ぐらいして電話をかけて友人と話したとき、最高に気持ちよかった。（法3、男）

・高校からの親友が今度の震災で亡くなりました。ほかのことで頭がいっぱいだったことと、彼女なら私のことをよく知ってくれているし、自分から努力をそんなにしなくても友達関係でずっといてくれると思って、女友達の大切さを少し忘れかけていた時だったので、とても後悔しました。今だに彼女の死から逃げています。（文2、女）

〔入学以前からの異性友人関係〕〔その他〕については省略する。

〔4回生以上の学生で心理的混乱のあと、再統合して主体的な自我形成に至ったと思われる記述内容〕

・大学に入学して「自分とは何か？」と、とてもいろんなことを通して考えさせられました。それはいい意味でも悪い意味でも私が行っていた活動だと思います。結局3年間していた中で、それをみつけだすことはできなかったが、友人との議論はあり、よく泣いたし、訴えたりした。たくさん本も読んだし、友人にも相談した。それによって、自分の思っていることを伝えなければ何もはじまらないということを教えられた。人とのつながりを知るいい大学生活だったと思う。そう思える自分が少しは好きになった。（文4、女）

・小学校～高校まで私立に通っていたので、12年間同じところで過ごしていました。そこで「自分」というものをもって、友人や先生からそれな

りに認められていたものが、大学という開けた世界にきたときにもう通用しないのだと思った。特に女子ばかりの中だったので、男の子がたくさんいるのも変な感じだったし、私が「悪いこと」とおもってきたことをみんな自由にやっているのをみて、「自分」が音をたててくずれてしまいそうな感じだった。（文、研究生、女）

・私は昨年アメリカへ語学留学してきた。その際、学校の友人達の間になかなか入れないでいました。そのことを自分の英語力のなさだと思っていたのですが、同じ英語を学びにきているヨーロッパ人達をみると、下手な英語でどんどん話していました。私はそれをみて、要はコミュニケーション力だと思い、今までの悩みが吹き飛びました。私はその体験から、自分から働きかけなければ相手は何もしてくれないという、欧米のきびしい考え方を学びました。（経営4、男）

・運命論的に「自分は何の目的を課せられて生まれていたんだろう？」なんてことや、正しく生きる（自分があまりにもいい加減なため）ことはどうということだろうかと考えていたけれど、結局具体的な行動をおこし続ける以外、自分を確認できないだろうという結論に至る。（経営4、男）

・僕はロックやソウルなどの音楽が好きで、自分でギターを弾くし、バイトの経験もあった。が、軽音楽部はいかにもと思い、関係のないクラブに入った。すると、そこの人たちは、今まで僕のまわりにいた人と違って音楽がいちばんカッコいいことや意味あるものでなかった。最初は合わせるのにずいぶん悩んだけど、おかげで自分の価値観やものの見方を広げることができたし、いろんな人間がいるなあって、当たり前のことも分かった。（経営4、男）

・留年して2回就職活動をして、2度同じ会社から内定を頂きました。今までずっと「能力」ということにこだわっていましたが、今では「精一杯」という姿勢を大事にしようと思っています。（経済5、男）

・今の自分が4回生だから将来のことは特に考えている。この時期にきて、今さら大学名で左右される状況に涙と怒りがあふれてきた。けれど、もがいても仕方ないことと思ひ、自分に正直で笑顔を忘れずにいくのが一番だと思った。今後もこんな自分であり続けたい(無事内定!)。(経営4、男)

6. 考 察

今まで、大学2・3回生の心理的混乱の種類とその具体的な体験記述をみてきた。学生たちはそれぞれの場面でいったんは心理的に混乱するものの、その状況にふさわしい新たに自分なりのとらえ方を模索している様子がうかがわれる。

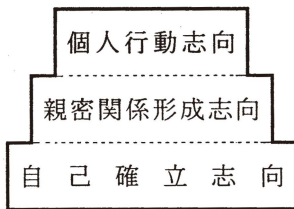
吉良は、1回生の心理的混乱は活動遂行場面や対人関係のみならず日常生活面レベルまでまきこんだものであると報告した。一回生での課題であった大学生活への移行・適応はほぼ完了したと考えられる、2・3回生の心理的混乱の主なもの、「自分のあり方や性格」と、同性や異性との「対人関係」が主なものである。吉良は1回生の心理的混乱でも2番目に多かった「自分のあり方や性格」については、「新しい環境、新しい人間関係に直面しての自分への気づきやとまどいを反映している面が大きい」ので、対人関係レベルの中に入るとしたが、2・3回生の体験記述を讀んでいくと、吉良が報告している1回生の体験記述とは微妙な違いがあるように思われる。いろいろな人との出会いを通して、それまでもっていた自分の考えや親の価値観を再検討している点は共通だが、学年が進むとさらに自分自身に対する根源的な問いや疑問が多くなるように思われる。1回生では、新しく出会った他者に目を奪われて自分と比較したり、劣等感に苛まれたり、ともすれば否定的になりがちな記述が多いが、2・3回生ではそれが一段と深化されて、自分の存在意義や人生の意味なども考えてみようとしている。学生たちはそうとは気づいてはいないが、自分のあり方や性格を通して、漠然と「自分とは何か」「人間

は何のために生きるのか」「人生にはどのような意味があるのか」などを考え始めているようだ。西平(1964)はこれらの問いかけには、「全存在をかけて、主体的に答える」ことが求められているとする。自我とのかかわりなしに、表面的な仮りの答えを出したり、あるいは途中で放り投げてしまう者もいるが、多くの学生はこの時期に真剣に自分自身を見つめようとする。クラブ・サークル活動においても、新人としてちやほやされた1回生と、部長としてリーダーシップを求められたりゼミメンバーとなり何かと責任の重くなる3回生の間で、なんとなく手もちぶたさになるのが2回生である。鶴田はこれを「あいまいさの中での深まりの期間」と表現した。もちろん答えは見つからず、不全感を抱きつつ日々を過ごし、その息苦しさを自分の力不足と思ひこんで、いったんは悲観的になることもある。だが、胸の中に鉛を呑みこんだような重苦しさを感じながらも、表面的にはあくまでも明るく、なにげなさを装うことも彼らの特徴のひとつであろう。

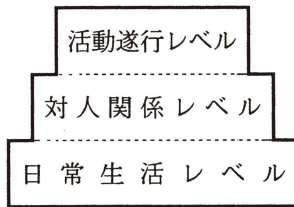
大学生活の4年間を概観すると、1回生では新しい環境やさまざまな人間と出会い、肯定的にも否定的にも(圧倒的にこちらの方が多いが)いったんは混乱する。2回生ではその混乱が深化して、漠然とではあるが自分自身に対する根源的な問いかけを試みようとする。3回生になると現実的な問題へと目を転じて対処方法を模索し、4回生ではさらにその体験を意識化して、整理しようとする。そして最後に、卒業論文や卒業旅行を通して、大学でなしてきたことを再確認し、社会へ巣立つ準備を始めるといえるだろう。4回生の体験記述では、混乱し模索したのちに、新たに人の中へとけこんでいく生き方や自分なりの自己運営システムを見いだした様子が生き生きと書かれている。

大学1回生の心理的混乱を3つのレベルに整理して図式化した吉良に倣い(付表参照)、筆者も大学2・3回生の心理的混乱について図式化を試みた。

図2 大学2・3回生の、心理的な3つの志向



付表 吉良安之（九州大学教養部カウンセリングレポートNo.5 p60）



学生生活を成り立たせる3つのレベル

図2に示したように、大学2・3回生は心理的に3つの志向をもっていると思われる。「自己確立志向」は、学生が心理的混乱の第1位に「自分のあり方や性格」をあげたことによるものであり、いうまでもなく青年期の最大の発達課題である自我同一性獲得を意味している。次の「親密関係形成志向」は、本調査の上位に「入学後の新しい友人関係全般」や「入学後の新しい異性友人関係」「クラブ・サークル活動」があがったことによる。学生たちは対人関係や恋愛を通してさまざまな体験を重ね、青年期のもうひとつの重要なテーマである「親密感と孤独」の間でこころ揺すぶられる毎日を送っており、そのことが反映されたものと思われる。3つめの「個人行動志向」というのは、他者と分かちあうことには馴染まない本人だけに属する問題、たとえば「将来のこと」「学業面または自分の能力や学力」「経済面」「アルバイト」「家族との関係」などをさす。これらの問題を自分で選択し、決定していくことを通して、次第に現実を吟味する力を身につけていくのであろう。

以上のように、大学2・3回生はおおまかに3つの志向をもっているといえる。しかし、これら3つの志向にかなった答えを見つけだすには2年間（あるいは大学の4年間）という期間はあまりにも短い。たとえいったんは答えが見つかったかのようにみえても、この3つのテーマは姿を変え、形を変えて現われ、一生を通じて取り組み続けるべきものである。私たち大人は、屈託なくキャンパスを行きかう学生たちの明るさと軽やかさにともしれば目を奪われがちだ。しかし彼らがつねに、自己確立という遠くて重い課題を背負って、挑戦したり挫折したりしていることにも、しっかりと目を向けていきたい。

最後になったが、面倒なアンケートにもかかわらず、終始誠実な態度で回答し、個人的な体験さえも快く明らかにしてくれた、大勢の受講生たちに心からお礼を申し上げたい。また、貴重な論文の準拠をお許し下さった九州大学の吉良安之先生、詳しい資料をお送りいただいた名古屋大学の鶴田和美先生にも深く感謝の意を表したい。

引用文献

- 福井裕子・友久茂子・前田聖津子 現代大学生の友情とエロスについて 甲南大学学生相談室紀要第1号；14-22 1993
- 河合隼雄 事例研究の意義と問題点『心理療法論考』292,294 誠信書房 1986
- 吉良安之 大学入学後の心理的混乱の諸側面 九州大学教養部カウンセリングレポートNo.5 50-61 1993
- 文部省 1995年度学校基本調査（毎日新聞 1995年 8月11日付大阪版より引用）
- 西平直喜 青年分析 25-26 第日本図書 1964
- 西川隆蔵 大学生における自己の二面性の研究 学生相談研究14 1-10 1993
- 鶴田和美 学生相談の事例から見た大学2年生の心理的特徴 全国学生相談研究会議報告書24号 131-141 1991a

鶴田和美 来談学年からみた大学生の個別相談事例の心理学的特徴 名古屋大学学生相談室紀要

5 3-29 1993b

ABSTRACT

Some Aspects of Psychological Confusion and Self-Examination for
Sophomore and Junior University Students

FUKUI, Hiroko
Konan University

This paper gives some aspects of psychological confusion (positive or negative) and self-examination for sophomore and junior university students. 123 students answered the questionnaire and they also described the contents of their confusion in detail.

The questionnaire showed various kinds of psychological confusion: among them, their own attitude toward themselves or their personality, relationship with friends of the same or opposite gender and problems in club activities. To acquire their own identity, they search for what life means or what they can do. Some differences of psychological confusion are detected. Those differences depend on the school year, gender and whether they live with their family or not. Their description shows various aspects of their confusion and self-examination.

Key Words: psychological confusion, self-examination, ego-identity
